

平塚柔道物語 5 7

日本一美しい言葉

—ありがとう100%のお別れ会—

平塚柔道協会 会長 奥山晴治

この3年間好きな柔道に全力をかけて来た浜岳中学3年生が卒業する春を迎えたのである。卒業式2日前の3月3日(平成25年)に卒業生を送る「お別れ会」が学校の柔道場で午後1時より6時半まで行われた。出席者は保護者・生徒・教師・コーチ・私を含めて約百名であった。寒い会場であったが、笑いあり、涙ありの感動的なお別れ会となった。初めに、真田二郎教師が3人の部活教師を代表して、柔道卒業証書を渡す。これも真田教師が発案した心のこもった授与式であった。彼の一人一人への3年間の思いがこめられた言葉あり、最後に、年間300日を超える稽古を3年間通して頑張り続け、計900日にわたる修行を終了したことを証しますと結んであった。そのあと、卒業生一人に対して一人ずつの在校生が感謝の言葉を述べた。「〇〇先輩、僕が試合に負け、落ち込んでいた時、声をかけてくれてありがとうございます。」など、様々なエピソードを通しての感謝の言葉があり、卒業生一人一人の心に深く残ったものと思う。そのようなことを陰で提案した真田教師の心遣いにも頭が下がる。そして最後に、卒業生一人一人が、教師やコーチ、父母、在校生、同じ仲間(卒業生)に感謝の言葉を述べた。生徒一人一人は皆、初めから最後まで泣いていた。途中でつまってしまい言葉にならなかった生徒も何人かいた。話す者も涙、聞くも涙であった。私も昔見た「二十四の瞳」の映画を見ているような気持ちになっていた。体は小さかったが、見事に初段をとった石原康輝君に私は大変感動した。彼は初めから泣きながら「真田先生、僕が足を痛めて入院している時に、何回も見舞いに来て激励をして下さり、ほんとうに嬉しかったです。鳥のカラアゲをいつも買って来て頂き、必ず治るよ! あせるな、くさるなど言いながら、この機会に体重を増やせとも言ってくれました。ほんとうにありがとう」と…。また、体重の重い松澤ヒデキ君は「おかあさん、いつも協会への車で迎えてありがと

う。お父さんも大会でいつもビデオを撮ってくれてありがとう」といった。撮ったビデオを見せながらお父さんが意見を述べたのであろう。反抗期でもある彼の次の言葉に私は感動した。

「お父さんの話を僕は横を向いて聞いていないふりをしていたが、ほんとうはお父さんの話を聞いていたんです」と涙ながらに語り、「お父さん、これからもよろしくお願いします」と言う。お父さんもきっと心で泣いていたに違いない。また、酒井進之助君という生徒は、休日の午前中は野球、午後は柔道の練習に参加というように、この3年間柔道と野球を両方やりとげたという。先生と生徒に「僕が野球をやっていたことを皆許してくれてありがとう」という言葉が私の心に残る。2つもやるということは、2つをやり切り、ここで広島の野球の強い高校に進学するという。試合巧者の協会少年部からずっとやって来た檜山和實君はダンスの才能が買われて、高校からダンスに転向するという。彼の習い覚えたダンスの演技を見せてくれた。卒業生13人は皆、まさに柔道を通しての人間教育があったと、私は心から感動した。

日本で一番美しい言葉は何かといえ「ありがとう」という言葉であるという。その「ありがとう」の言葉が一番使われたお別れ会であったといえよう。卒業すると皆、全国大会に出場した熊野暢彦君は山梨県の高校へ、主将の片倉弘貴君は群馬県へ、新倉亮太君は山形県へ、一番体も小さかったが見事初段をとった脇田龍斗君は長野県へ、おのおの日本一を目指し、地元より出陣して行くのである。地元の神奈川県に残るメンバーも含めて、今後の成長と大なる活躍を期待したいものである。



お別れ会での卒業生と保護者・教師・コーチ